

雲

息子の手紙

Nuages lettres à mon fils

a film by MARION HANSEL

french texts read by CATHERINE DENEUVE

english texts read by CHARLOTTE RAMPLING

Catherine Deneuve reads the French version
Charlotte Rampling reads the English version
Carmen Maura reads the Spanish version
Barbara Auer reads the German version
Anje De Boeck reads the Dutch version

Writer-director: Marion Hansel

Directors of photography: Didier Frateur
Pio Corradi

Sound engineer: Henri Morelle

Sound mixer: Bruno Tarrere

Editor: Michele Hubinon

Production manager: Linda Van Tulden

Original music composed by: Michael Galasso

With the support of:

Eurimages - European Fund of the Council of Europe

Le Centre du Cinema et de l'Audiovisuel

de la Communauté

Française de Belgique et des Teledistributeurs Wallons

Fonds Film in Vlaanderen

Filmförderung Hamburg

Hessische Filmförderung

ZDF/ARTE

The Media Programme of the European Union

development and distribution

La Loterie Nationale

Co-producers: Pegasus Films - Karl Baumgartner et Ernst Szebedits

Delegate producer: Marion Hansel

監督：マリオン・ハンセル

製作：マリオン・ハンセル、カール・バウムガートナー

声の出演：カトリーヌ・ドヌーヴ（仏語版）、シャーロット・ランプリング（英語版）

音楽：マイケル・ガラツ（花嫁年華）

2001/ベルギー＝ドイツ/76分/35mm/1:1.85/カラー/原題：Nuages

提供：キヤノンコミュニケーションズ 配給：キヤノンコミュニケーションズ、アップリンク

配給協力：レゾナント・コミュニケーション 協力：クリエイティブアークザ

後援：ベルギー大使館、ドイツ大使館

GAGA www.gaga.co.jp 公式サイト www.uplink.co.jp



定員各回入替制	
仏語版/声:カトリーヌ・ドヌーヴ	(日本語字幕)
11:00 15:00 19:00	
英語版/声:シャーロット・ランプリング	(日本語字幕)
13:00 17:00	
休演	9/13(月)・21(火)・27(月)・10/4(月)・12(火)・18(月)

※10/6(水)は17時と19時の回を休映します。御注意下さい。

お問い合わせ:アーツカウンタ (TEL 03-6821-6821)

○東京都写真美術館で開催する写真展の半券持参の方 ○東京都写真美術館友の会会員、三越カード・アトレカード会員の方 ○Weeklyぴあ最新号ご持参の方

次の方は、当日券が割引になります。

① 夫婦50割引! どちらかが50歳以上のご夫婦の場合、当日料金お二人で3,600円のところ2,000円になります。

② 雲の魅力を知っている、スカイスポーツ体験者割引 スカイスポーツ(スカイダイビング、熱気球、パラグライダーなど)をしている御自身の写真持参で一般・学生の方は200円割引致します。

③ 違うバージョンも観たいあなたへ、リピーター割引! 『雲-息子への手紙』の半券持参で一般・学生の方は200円割引致します。

リラックスした風合いが絶大な人気を誇るフタバアとのコラボレーション決定!
『雲-息子への手紙』をイメージしたオリジナルグッズ(宇津木えり氏デザイン)を
全国のフタバアショップと劇場窓口にて限定販売します。 詳細は www.frappois.jp



雲見の旅へ離陸します。風に吹かれながら……。

雲と地球と私達を見えない風が導いてくれます。雲は風のゆくえを教えてくれる空先案内人です。

雲は空よりのメッセージ。広げて無口な空の気分を伝えてくれる語り部です。

高 本 裕 久 (気球飛行家)

。それとも不幸せな時がいいのだろうか。

。この映画を観るのは幸せな時がいいのだろうか。

。離れて行こうとするドラマは優しく、いとおしい。

。自然が織りなす大きな背景の中で、一人の子供が生まれて、育ち、

。こゝろという映画を創ろうという発想に、そして創りながら行動力に、感動しながらはいられない。

岸田今日子 (女優)

松浦弥太郎 (文筆家・COW BOOKS)

「毎日空を眺めています」。旅先の恋人から届いた手紙にこう書かれていた。

「ぼくもそうなんだ」とすくに返事を書いた思い出がある。一人の時、ぼくは空を眺める。

空に浮かぶ雲を見つめ、風に吹かれ、日に包まれて、いつまでも空を眺める。

空を眺めれば淋しくなかった。時には、お母さん、お父さん、友達、恋人を思いながら空を眺めた。この空はいつも誰かとながっている。「雲-息子への手紙」を観て、それは本当なんだと思えた。

イノウエチハル (銅版画家)

はじめて見る今日の雲は、いつかどこかで見た雲とながって行く。

はじめて聞く息子の想いは、いつかのわたしとながって行く。

新しく生まれるすべてのものが、いつかのどこかとながって、

すべては消えないように流れている。

“雲を見て何と言をばいい?”

“見るだけでいい それだけで十分”

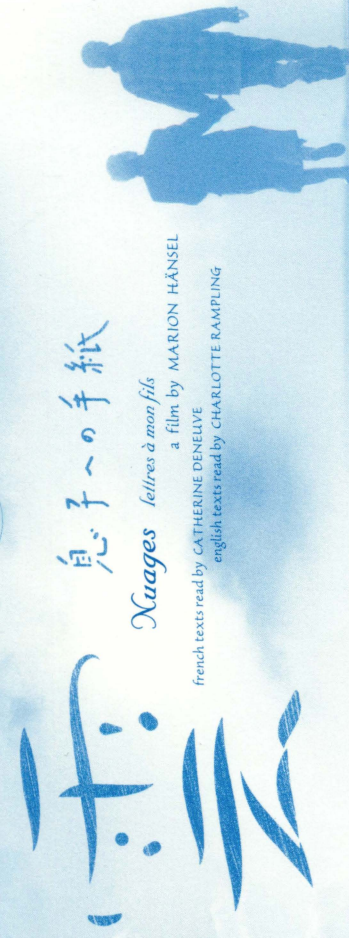
はじめて見る今日の雲は、いつかどこかで見る雲とながっているから。

第54回カンヌ国際映画祭批評家週間クロージング作品



『雲-息子への手紙』は地球に対するオマージュです。
一度くらい自然のリズムにあわせてみよう、自然にリードされよう、そういった気持ちが発展して
もう少し地球に近づいてみてたらどうだろう、そうすることで、地球の美しさ
一方でそれはそれが汚染されている危機的な現実を、
たくさんの人に伝えたいと考えたのです。

マリオン・ヘンセル監督



息子への手紙

Naages *lettres à mon fils*

a film by MARION HÄNSEL

french texts read by CATHERINE DENELIVE

english texts read by CHARLOTTE RAMPLING

あなたは今日の雲の色を知っていますか？

【雲】の世界へいざなう、かつてないスケールで描いたネイチャー・ドキュメンタリー
アフリカ最南端の喜望峯、地震と火山の島国アイスランド、スコットランドの牧草地、ヨーロッパをまた
がるアルプス山脈、インド洋に浮かぶマダガスカル島…。【雲】に魅せられた女性監督マリオン・ヘンセル
が世界各地を旅しながら飛行機やヘリコプター、熱気球を使って、【雲】と美しいだけではないありのまま
の自然の姿を力強く描いたドキュメンタリー。熱気球に乗って撮影したコロンビアでは霧があまりにも激
しくスタッフ全員が長時間待機したり、レユニオン島(マダガスカル島の右側にある小さな島)ではモンスーン
のために数週間待ち続けたり、イタリアでの撮影中にエトナ火山が噴火し急いで避難したりと、苦労を重
ね1年以上かけて撮影され誕生したのが『雲-息子への手紙』です。

最愛の息子に宛てた手紙を

ベテラン女優カトリーヌ・ドヌーヴと

シャーロット・ランプリングが朗読

監督は、旅の途中で息子を妊娠・出産、続く夫との別離、さらには息子が成長していく過程を、最愛の息
子に宛てた母親からの手紙(朗読)という形で詩的に描き出しました。ナレーションはヨーロッパを代表す
るベテラン女優、カトリーヌ・ドヌーヴ(仏語版)とシャーロット・ランプリング(英語版)が担当しており、
日本では二人の声色の違いが楽しめるよう仏・英の2バージョン(日本語字幕付)で劇場公開します。

現れては形を変え消えていく【雲】、成長し自分のもとを巣立っていく息子に、彼女は何を想い、何を見い
出したのか……。冒険家でもあるマリオン・ヘンセル監督が【雲】に託した“こころ”の旅の物語です。

『花樣年華』のヒットに大きく貢献したマイケル・ガラツンによる美しい音楽

全編を流れる印象的な音楽は国際的に知られる作曲家/ヴァイオリニストのマイケル・ガラツリ。日本の
琴やブラジルのパーカッションなど世界各地の楽器が奏でるゆったりとした心地よい旋律は、【雲】のもつ
スケール感と浮遊感を見事に表現しています。

また、旅に出よう。……………石川直樹(冒険家/作家)

考えてみると、ぼくはいつも雲を見ながら旅していた。太平洋をカヌーで航海したとき
は雨雲を探して飲み水を確保し、ヒマラヤ登山では見上げる山頂を覆っている雲をうらめしく
思った。熱気球に乗って高度8000メートルの昔のない世界へ上がったときは、月明かり
に照らされた雲の模様によって進んでいる方向や速度を確認したり、分厚い雪雲に気球
の進路を阻まれたこともあった。予兆であり、目印であり、支えであり、今いる場所の
状況を占うバロメーターでもある存在、それがぼくにとっての“雲”だった。

本作品は、そのような千変万化の雲をあらゆる場所から撮影し、手の届かない雲上の
世界をこれ以上ないというほど緻密に追いかけている。一所にとどまっていたは見られ
ない多様な雲をスクリーンの前で一気に眺められる幸せをぜひ味わってほしい。カメラ
は雲を見上げ、見下ろし、そしてさらに雲のただ中へと入り込んでいく。水平方向への
移動に慣れた自分たちの視線を垂直方向へ、いわば三次元の世界へと否か応にも引きず
り込んでくれるのだ。

早回しされて生き物のように変化する雲海の映像群に、凝縮された地球の時間を感じ
る一方、息子への手紙を通じて監督であるマリオン・ヘンセルの人生の時間がフラッシュ
バックされていく。それらの時間を交互に見つめていると、凝視しないとわからないほ
どゆっくり移動する雲のように、自分たちの身近にある日々の生活が微細に変化し続け
ていることを意識する。雲が二度と同じ形を見せないのと同様、後戻りできない唯一無
二の時間をわたしたちは今この瞬間生きている。

生まれては消えていく雲の存在が、旅の途上にある世界中の人々の営みと重なった。
映画館を出た後、流れる雲に自分の姿を投影しながら、ここではないどこかで見上げる
であろう新しい雲に思いを馳せる。また、旅に出よう。そう思わせる作品だった。